

未知との遭遇（エルサルバドル体験記）

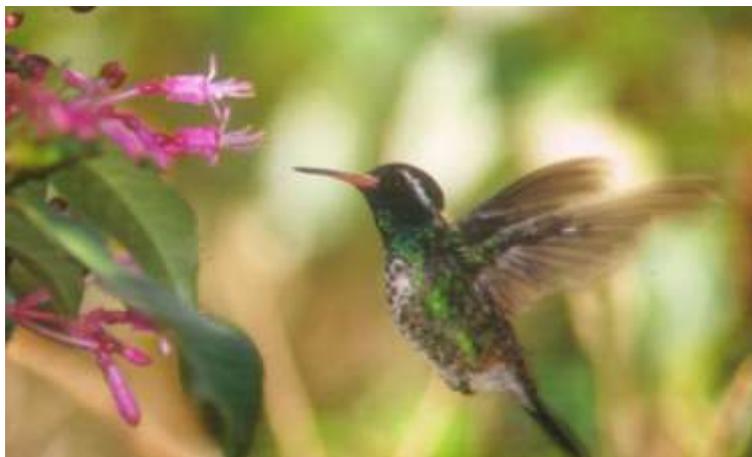
20世紀も終わりに近い1996年から3年間、私は青年海外協力隊隊員として、ここエルサルバドルで過ごしました。12年にも及んだ内戦は終結したものの、その影響が物心両面、人々の生活に影を落としていた時期でした。派遣前の情報では内戦後の処理が不十分で山中には地雷が埋まっている…など、職種が動物の生態調査ということで、実際、現場に出ることができるのか、不安な赴任となりました。

ここでは体験記ということで、首都での下宿生活を紹介します。堅気の皆さんからすれば、憚られる内容もあるのですが、それは事実、今は昔の事としてご理解ください。職種の生態調査に関してはプロジェクトで撮り貯めた写真の中からベストショットをご覧ください。



首都サンサルバドルでの生活は一般家庭に下宿して、職場（政府の役所）に通勤する都市在住型で、気のいい大家さんと快適な3年間を過ごすことができました。と、こう書くと、穏やかな隊員生活が想像されますが、我が家は内戦後スラム化した住宅街の真只中、任期2年目には「治安上問題あり」ということで隊員の居住は禁止になってしまいました。確かに夜間、我が家の裏窓の先からは小口径の拳銃と思われる銃声が聞こえ、私も昼間は草刈り用の山刀を渡されていました。これは店子を心配した大家さんお勧めの護身用で、街中のスーパーにも帯刀して出かけました。幸い、この刃渡り90cmほどのピースメーカー、出番もなく、ただ重だけの無用の長物として私の腰飾りで終わりました。

任期中、刃傷沙汰は無かったものの、一度、仲良くしていたサルバドル人の青年が家の前で泡を吹いて痙攣を起しているのに出会い、近所の人と手当てしたことがありました。以前から薬物中毒だと気付いてはいたのですが、どうやら塗装用のシンナーを吸っ



ていたようです。しかし、その怪しい友人たちは治安上の危険にも敏感で、まあ当事者でも

あるのですが…、近所の情報網もあり、十分な警戒ができるかと判断、協力隊事務所と交渉の末、そこに住み続ける許可が下りました。

と、物騒な話ばかりではありません。当時の交通事情、移動はバスが普通で、近所にもその運転手と車掌が住んでいました。ある時、そのバスを借り切って、近所の人たちと山間の国立公園まで遠足に出かけたことがありました。それこそ日本の下町、長屋の花見のような物見遊山、楽しい思い出です。もっとも、大型のバスが山間の細い道を昇り降り、滑落の予感に肝を冷やし、街中の物騒さとは違ったスリルを味わうことになるのですが…



それにしても苦労したのはスペイン語、実際に使いながら学び、覚えていくのですが、基本は真似、耳で聞いたままを真似て、その状況と合わせて使いこなしていくこととなります。赴任して間もない頃のこと、大家さんが我が家のキッチンで走りまわっている近所の子供たちに「チュウチヨ！」と呼び掛けているのです。以後、子供への呼びかけに多用、後に語学

に堪能な同僚隊員から「ほとんど蔑称に近い『犬っころ』ぐらいの意味だ」と教えられ、バツの悪い思いをしたことがありました。自分の語学の才能の無さを痛感した3年間でした。

もう20年以上も前のことで、内戦後の混乱期、短期滞在の一外国人の思い出と捉えていただくと幸いです。この3年間は私にとって、まさに「未知との遭遇」と結びたいところですが、日本で私が育ったのは昭和30年代、米軍基地に近い歓楽街で、ガラが悪く、ここエルサルバドルのスラム街も「いつか来た道」のように感じた日々でした。

大井手 淳也（おおいで じゅんや）氏

1996年4月から3年間、青年海外協力隊隊員（職種：生態調査）としてエルサルバドル農牧省に勤務。同時期に派遣された視聴覚教育、森林保護、植生調査の隊員とともに環境関連のチームとして活動、自然環境の記録作成に従事した。